

「深く考える」授業の創造

(3年計画の2年目)

研究主任 高杉 廣張

1. 研究主題設定の理由

現代の情報伝達技術の発展は、私たちが必要とする様々な情報をいつでも、どこでも手に入れることができるようにした。それだけでなく、自分の考えを容易に発信できるようにもした。私たちの生きるコミュニティは世界的規模にまで広がり、様々な知識や情報、価値観をもつ人々とつながることを可能にしている。いつでも、どこでも、誰とでもつながることを可能にした社会では、日々、知識や情報、価値観は更新され、私たちの周囲には様々な知識や情報、価値観があふれている。このように変化の激しい社会においては、既存の知識や情報、価値観だけを当てはめて解決できるような課題ばかりではないであろう。状況に応じて、既存の知識や情報をもとにして、修正して活用したり、関連付けてまとめたり、足りない知識を補ったりするなど、新たな知識や価値を創造していく力が求められている。

このように変化の激しい社会情勢の中、学校教育においてどのようなことができるであろうか。既存の知識や情報を当てはめて解決できるような学習ばかりでは、これからの社会に対応できない。既存の知識や情報をもとにして修正したり、いくつかの知識や情報を関連付けたり、補ったりなどして、状況に応じた解決を図っていくような学習が求められていると考える。すなわち、「何を知っているか」で完結するような学習から、既存の知識や情報を活用して「何ができるか」「どのような解決ができるのか」を創造的に考える学習への転換が迫られていると言えるのではないだろうか。

生徒には、課題を解決するにあたって、既習事項やそのときに得られた知識や情報に対し、「本当に十分なのか」「足りないものはあるのか」「確かなのか」と吟味しようとする姿勢をもってほしいと考える。例えば、それらと関わりのある事柄に目を向けて、関係を捉えようとしたり、全体構造をつかもうとしたりすることなどである。中学校段階では、そのような全体構造について、根拠を明らかにして理論的に理解することは難しい場合もあるが、生徒にそのような姿勢をもたせようということは重要なことである。

生徒は授業の中でどのような学習プロセスを経るのだろうか。生徒は課題に直面したとき、解決に向けて見直しをもったり、試行錯誤したりしながら、ある結論に到達する。この時得られた結論が、その生徒が納得するものであったとする。そのような結論を「自分なりの結論」とすると、「自分なりの結論」に到達したことで課題は解決したと考え、その生徒の学習はそこで終わるのである。しかし、本研究では、生徒が「自分なりの結論」に到達したあと、そこにとどまるのではなく、「自分なりの結論」を吟味して、それを改善したり、発展させたりすることを目指すのである。このような授業を「深く考える」授業と呼び、「自分なりの結論」を吟味し、それを改善したり、発展させたりするプロセスを重視する。よって、本研究は「『深く考える』授業の創造」を研究主題として掲げ、すべての教科で実践を積み重ねていくこととする。

しかし、「自分なりの結論」に到達した生徒が、それを吟味し、改善したり、発展させたりすることは容易ではないだろう。その生徒は「自分なりの結論」に満足しており、それを改めて吟味する必要性を感じていない場合が多いのではないだろうか。「深く考える」授業を実現するためには、この状況を打開する必要があると考える。

2. 「深く考える」授業を実現するための手立て

「自分なりの結論」に満足している状況を打開し、それを吟味する必要性を生徒に感じさせるにはどのようにしたらよいだろうか。本研究では、その手立てとして「視点を変える」活動を授業の中に意図的に取り入れることとした。「自分なりの結論」は、生徒のもつ知識や情報、価値観などから生み出されるものだと考える。したがって、生徒がもつ知識や情報、価値観などをふまえ、生徒が「自分なりの結論」に満足している状況に新たな視点を与え、ゆさぶりをかけることが重要である。このように、新たな視点を与えるような活動を「視点を変える」活動と呼んでいる。

「視点を変える」活動には、さまざまな特徴がある。例えば、「自分なりの結論」がものごとの一部分のみにこだわって導き出されている場合が考えられる。その時に、ものごとを全体的に捉え直すことで生徒の視点が変わり、「自分なりの結論」を改善したり、発展させたりするきっかけになることがある。逆に、ものごとの全体像を大まかに見て導き出された結論に対し、一部分に焦点を当てて捉え直すことで生徒の視点が変わることもあり得る。また、ものごとを異なる立場（観点、基準、価値観など）から捉え直すことによって、生徒の視点が変わることも考えられるだろう。

なお、ここにあげた三つの特徴は、教科の特性や学習場面によって、一つの「視点を変える」活動に、複数の特徴が含まれることも想定している。

3. 研究内容

本研究は3年計画で進めている。生徒は将来、状況に応じて、既存の知識や情報をもとにして、修正して活用したり、関連付けてまとめたり、足りない知識を補ったりするなど、新たな知識や価値を創造していく力を身につけていく必要があると考える。そのためには、長い時間をかけて「深く考える」経験を積み重ねていかなければならないだろう。中学校段階では、すべての教科で、可能な限り多くの「深く考える」授業を構成し、実践することとしたい。

研究初年度は、本研究主題でもある「深く考える」授業について規定し、それを実現するための手立てを明らかにすることを目的として研究を進めてきた。生徒が「深く考える」ためには、自分自身の考えについて見つめ直す機会をつくることが重要だと考え、『自分自身を俯瞰する』活動を手立てとして授業に取り入れることとした。事前研究会や公開研究会において、授業に『自分自身を俯瞰する』活動を具体的に取り入れ実践をしてきた。実践を通して、『自分自身を俯瞰する』活動には、全体を見たり、一部を見たり、立場を変えて見たりなど、いくつかの特徴が見いだされた。

研究2年目となる今年度は、引き続き、「深く考える」授業の規定とそのための手立てについて明らかにすることを目的とする。昨年度『自分自身を俯瞰する』活動に見られたいくつかの特徴を全て含める意味で「視点を変える」活動と表現を改めることとした。事前研究会や公開研究会では、各教科で「深く考える」授業をどのように捉え、どのような「視点を変える」活動を取り入れたのかを明らかにした上で実践を行う。実践した授業記録を基に、授業の実際について、具体的な生徒の姿などにも触れながら、教科ごとに整理し、考察を加えていきたい。そして、そこから得られた示唆をもとに、最終年次の研究につなげていきたい。

研究3年目は、引き続き実践を積み重ねていくとともに、3年間の実践研究の成果から、「深く考える」授業を実現するための手立てとして「視点を変える」活動の有効性を各教科で明らかにすることを目的とする。また、「視点を変える」活動以外の手立てや「深く考える」授業の有効性についても理論的にまとめていくことを目指して研究を進めていきたい。

4. 本年度の校内研究経過

第1回	校内研	4月	3日(金)	研究主題、研究内容の確認
第1回	教科研	4月	3日(金)	教科研究組織、公開研等授業者の確認
第2回	教科研	4月	27日(月)	研究の枠組み、第1回事前研について
第2回	校内研	5月	11日(月)	研究の枠組み
第3回	校内研	6月	1日(月)	研究の枠組み、教科研究について
第3回	教科研	6月	17日(水)	第1回授業研究会(理科)
第1回	事前研	7月	3日(金)午後	全体会、提案授業、研究協議(全9教科)
第4回	校内研	7月	21日(火)午前	夏季校内研① 第1回事前研報告 全体総論検討
第4回	教科研	7月	21日(火)午後	第2回事前研にむけて
第5回	校内研	8月	10日(月)午前	夏季校内研② 公開研にむけて
第5回	教科研	8月	10日(月)午後	第2回事前研にむけて
第6回	校内研	8月	18日(火)午前	夏季校内研③ 第2回事前研準備
第6回	教科研	8月	18日(火)午後	第2回事前研準備
第2回	事前研	8月	19日(水)午後	全体総論提案、教科総論提案、公開研究会指導案の提案
第7回	校内研	9月	16日(水)	公開研究会に向けて
第8回	校内研	9月	28日(月)	公開研究会の最終確認
中等教育研究会	10月	3日(土)		全体会、提案授業、研究協議(全9教科)
第8回	教科研	10月	26日(月)	公開研究会のまとめ
第9回	校内研	11月	16日(月)	公開研究会のまとめ
第10回	校内研	12月	2日(水)	今年度の研究のまとめ
第9回	教科研	1月	15日(金)	来年度の研究のまとめ
第11回	校内研	1月	25日(月)	今年度の研究のまとめ
第10回	教科研	2月	5日(金)	今年度の研究のまとめ、研究紀要原稿確認
第12回	校内研	2月	19日(金)	来年度の研究について
第13回	校内研	3月	2日(月)	来年度の研究について

◆第1回事前研究会

- ① 日時 7月3日(金) 13:30-16:30
 ② 流れ 全体会 13:30-14:00
 研究授業 14:10-15:00
 各教科分科会 15:10-16:30
 ③ 内容 全体研究総論の提案, 各教科研究総論の検討, 授業提案および協議
 ④ 授業者及び会場

教科	教科主任	授業者	クラス	会場	分科会会場
国語科	富高 勇樹	富高 勇樹	3-4	図書室	図書室
社会科	田邊 靖博	田邊 靖博	3-3	3-3教室	3-4教室
数学科	櫻井 順矢	櫻井 順矢	1-1	1-1教室	2-1教室
理科	宮澤 和孝	萩原 修	1-4	第2理科室	第1理科室
音楽科	小林 美佳	小林 美佳	2-2	第1音楽室	第1音楽室
美術科	小俣 直喜	小俣 直喜	1-3	美術室	美術室
保健体育科	野沢 克美	秋山 知洋	3-1, 2	体育館	3-1教室
技術科	山主 公彦	山主 公彦	2-1	第2コンピュータ室	第1コンピュータ室
家庭科		山本 裕子	1-2	1-2教室	1-2教室
英語科	大矢 裕子	大矢 裕子	2-4	2-4教室	2-2教室

◆第2回事前研究会

- ① 日時 8月19日(水) 13:00-15:30
 ※以下の教科については, 下記の日程で開催
 国語 8月21日(金) 13:30~
 数学 8月28日(金) 17:00~
 音楽 8月28日(金) 17:00~
 保体 8月19日(水) 8:30~
 ② 流れ 全体会 13:00-13:30
 分科会 13:40-15:30
 ③ 内容 ・全体総論の再提案, 各教科研究総論の再提案, 公開研究会指導案の検討
 ④ 会場 全体会 赤レンガ館
 分科会 下表参照

教科	教科主任	事前研2会場	教科	教科主任	事前研2会場
国語科	富高 勇樹	図書室	社会科	田邊 靖博	1-4教室
数学科	櫻井 順矢	赤レンガ館	理科	宮澤 和孝	第1理科室
音楽科	小林 美佳	校長室	美術科	小俣 直喜	美術室
保健体育科	野沢 克美	2-3教室	技術家庭科 (技術分野)	山主 公彦	第1コンピュータ室
英語科	大矢 裕子	2-4教室	技術家庭科 (家庭分野)		1-2教室

◆中等教育研究会（公開研究会）

① 日時 10月3日（土） 9:00-15:40

② 時程

研究授業 I のみ		研究授業 I・II もしくは II のみ	
8:30-9:00	受付	8:30-9:00	受付
9:00-9:45	全体会 (45)	9:00-9:45	全体会 (45)
10:00-10:50	研究授業 I (50)	※研究授業 I への参加も可	
11:10-12:40	分科会 I (90)	11:10-12:00	研究授業 II (50)
12:40-13:40	昼食	12:00-13:00	昼食・休憩
		13:00-15:40	分科会 (160)

8:30	9:00	9:45	10:00	10:50	11:10	12:40	13:40
受付	全体会	移動	公開授業 I	移動	分科会 I	昼食	
					公開授業 II	昼食・休憩	分科会 II
				10:50	11:10	12:00	13:00
							15:40

③ 授業者および会場

教科	教科主任	授業者	授業学級	会場
国語科	富高 勇樹	富高 勇樹	3-4	図書室
		保坂 久信	2-4	2-4 教室
社会科	田邊 靖博	佐野 愛	1-1	1-1 教室
数学科	櫻井 順矢	日向 昭子	3-2	3-2 教室
		井上 透	2-1	2-1 教室
理科	宮澤 和孝	柳澤 真	3-3	第1理科室
音楽科	小林 美佳	小林 美佳	2-2	第1音楽室
美術科	小俣 直喜	小俣 直喜	1-2	美術室
保健体育科	野沢 克美	野沢 克美	2-3	体育館
技術家庭科 (技術分野)	山主 公彦	山主 公彦	2-3	第2コンピュータ室
技術家庭科 (家庭分野)		山本 裕子	1-4	1-4 教室
英語科	大矢 裕子	高杉 廣張	1-3	1-3 教室

5. 本年度の研究のまとめ

◆授業実践について

本研究では多くの授業実践を積み重ねることが重要になると考えている。それは、すべての教科において授業の形で示すことにより、本研究主題である「深く考える」授業に対する各教科の捉え方が具体的に示され、本研究のめざす授業像がわかりやすくなるからである。「深く考える」授業をすべての教科にも共通した一般的なモデルとして示すことはできないであろう。教科の特性があり、ねらいや重視していることが異なるからである。教科によってさまざまな形で示される授業をとおして、「深く考える」授業について共通理解を図っていきたい。

授業実践の積み重ねを重視するもう一つの理由は、生徒に『自分なりの結論』に到達したあと、そこにとどまるのではなく、『自分なりの結論』を吟味して、それを改善したり、発展させたりする」という経験を積ませたいからである。そうすることで、本研究で目指す、将来的な生徒像、すなわち、課題を解決するにあ

たって、既習事項やそのときに得られた知識や情報に対し、「本当に十分なのか」「足りないものはないのか」「確かなのか」と吟味する生徒の姿勢を養うことにつながると考える。

6月には、3年の理科授業（授業者：柳澤 真 教諭）を参観し、「深く考える」授業の規定やそのための手立てについて考える場として授業研究会を実施した。研究会では以下のような意見が出され、確認すべきことが少しずつ明らかにされていった。

- ・「視点を変える」活動が有効にはたらくように、課題設定などにおいて工夫が必要である。
- ・「視点を変える」活動を行うにあたっては、生徒が「自分なりの結論」をもてるよう考慮する必要がある。
- ・何をねらって、どのような「視点を変える」活動を仕組むのか、どのタイミングで「視点を変える」活動を入れるのかなど、教師がその意図をはっきりとさせておかなければならない。

今年度は事前研究会で10本、公開研究会において12本の授業を公開した。（昨年度は事前研で9本、公開研で12本の授業を提案した。）授業提案に際しては、本校職員はもちろん、共同研究者である山梨大学の先生方、指導助言者として山梨県教育委員会義務教育課、スポーツ健康課の指導主事の先生方、山梨県総合教育センターの先生方、さらには研究協力員として山梨県内の公立中学校の先生方（教科によっては小学校、高校の先生方も。詳細は資料1を参照）にご協力いただき、十分な吟味・検討を重ねてきた。また、授業後の研究協議会においても検討を重ねてきている。

○実践授業一覧（平成26年度事前研・公開研，平成27年度事前研・公開研）

教科	実施時期	授業者	学年	題材名（単元名）
国語	H26事前研	富高 勇樹	2年	「ビブリオバトルに挑戦しよう」 ～聞き手を想定し、論理的に話す～
	H26公開研	保坂 久信	1年	「今、改めて僕から私に伝えたいことをしたためる」 ～語り手に着目し、多角的な読み方をする～
		平井 規夫	3年	芭蕉の俳句の「よさ」を考えよう ～作品の魅力をもつ、自分のことばで表現する～
	H27事前研	富高 勇樹	3年	私はこう評価する、『高瀬舟』 ～多角的な視点から、作品に対する自分の考えを深める～
	H27公開研	保坂 久信	2年	「君は『最後の晚餐』を知っているか」のエッセンスを紹介しよう。 ～根拠を明確にして自分の考えをまとめる～
富高 勇樹		3年	『私』の抱いた「希望」について考える ～作品を読み深め、人間の生き方について自分の考えをもつ～	
社会	H26事前研	佐野 愛	3年	平等権と共生社会 ～在日外国人の参政権をめぐる～
	H26公開研	田邊 靖博	2年	「関東地方」一圏央道開通から何が見えてくるのか
	H27事前研	田邊 靖博	3年	「現在に続く日本と世界」一戦後日本は何をめざし、何を成し遂げ、何が課題となったのか
	H27公開研	佐野 愛	1年	展開する天皇・貴族の政治 ～なぜ紫式部は源氏物語を書くことができたのか～
数学	H26事前研	井上 透	1年	碁石の数を求めよう（文字と式）
	H26公開研	日向 昭子	2年	来年のスギ花粉の飛散量を予測しよう（1次関数）
		櫻井 順矢	3年	落下してくるボールに地面ギリギリでタッチするにはどうすればよ いだろうか（関数 $y=ax^2$ ）
	H27事前研	櫻井 順矢	1年	自然数の和で等式を作ってみよう（課題学習）
	H27公開研	日向 昭子	3年	ジェットコースターの速さの変化を考えよう（関数 $y=ax^2$ ）
井上 透		2年	赤玉はいくつ入っているのか（確率）	
理科	H26事前研	萩原 修	3年	「生命の連続性・遺伝の規則性と遺伝子」
	H26公開研	宮澤 和孝	1年	「身近な物理現象・水の圧力」
	H27事前研	萩原 修	1年	「物質のすがた・密度」
	H27公開研	柳澤 真	3年	「仕事とエネルギー・斜面を下る物体の運動」

教科	実施時期	授業者	学年	題材名（単元名）
音楽	H26事前研	小林 美佳	3年	5つの音をつかって、言葉にあった旋律をつくろう
	H26公開研	小林 美佳	3年	歌詞に合わせて旋律をつくろう！
	H27事前研	小林 美佳	2年	モチーフを変化させて、場面に合った旋律をつくろう
	H27公開研	小林 美佳	2年	物語をもとにして旋律をつくり、変奏させよう
美術	H26事前研	小俣 直喜	3年	〇〇な宇宙（墨による表現）
	H26公開研	小俣 直喜	3年	思い出の桐籠祭」～色や形で表そう～
	H27事前研	小俣 直喜	1年	美術でトーク～見て、感じて、語ろう～
	H27公開研	小俣 直喜	1年	自分の見方で～ゴッホの「星月夜」の鑑賞
保健	H26事前研	秋山 知洋	2年	陸上競技（ハードル走）
	H26公開研	秋山 知洋	2年	ダンス（現代的なリズムのダンス）
	H27事前研	秋山 知洋	3年	球技（ネット型 バドミントン）
	H27公開研	野沢 克美	2年	器械運動（跳び箱運動）
技術	H26事前研	山主 公彦	2年	3Dプリンタの加工技術
	H26公開研	山主 公彦	2年	3Dプリンタの技術を知ろう
	H27事前研	山主 公彦	2年	3Dプリンタで作ったコマを回そう
	H27公開研	山主 公彦	2年	3Dプリンタで作ったコマを回そう
家庭	H26公開研	河野美由紀	1年	住まいの安全 災害への備え
	H27事前研	山本 裕子	1年	共に住まう～家族みんなで快適な暮らしを～
	H27公開研	山本 裕子	1年	共に住まう～家族みんなで快適な暮らしを～
英語	H26事前研	野沢喜満子	2年	Homestay in the United States
	H26公開研	大矢 裕子	1年	ゆるキャラを紹介しよう
	H27事前研	大矢 裕子	2年	Show and Tell!! ～My Treasure～
	H27公開研	高杉 廣張	1年	疑問詞を用いて相手のことをよく知ろう

◆考察および成果と課題

研究2年目となる今年度は、

- ・各教科で「深く考える」授業をどのように捉えたのか。
- ・どのような「視点を変える」活動を取り入れたのか。

という点について、授業者のねらいを明らかにした上で、授業の実際について、具体的な生徒の姿などにも触れながら考察することを目的としてきた。そこで、今年度の中等教育研究会で提案した全9教科12時間の授業について、各教科で、実際の生徒の発言や行動の記録、それらから推察できる生徒の思考について書き出し、授業の成果と課題をまとめることとなった。

「自分なりの結論」は生徒により異なるものである。そこで、授業における生徒の様子を全体的に追うだけではなく、一人の生徒に焦点をあて、その生徒の様子を映像や音声により記録することとした。これにより、その生徒の様子は、ワークシートや作品の中からだけでなく、映像や音声による記録からも見とることができると考えた。

各教科の授業においては、「視点を変える」活動として、資料やモデルの提示、仲間との交流、タブレット端末を用いた振り返りなどが行われた。

例えば、社会科では「国風文化」についての授業を行い、「視点を変える」活動として、資料の提示を行うこととした。生徒は「国風文化」を「唐の影響を受けずに栄えた日本独自の文化」として捉えがちである。しかし、実際には「国風文化」とは「唐が崩壊したため、宋から流入してきた文物の影響を受けつつ栄えた日本独自の文化」である。生徒が「国風文化」について後者のように捉えるようになることをねらいとした。この授業を構成するにあたってさまざまな配慮や工夫をした。まず題材として「源氏物語」を取り上げたことである。「源氏物語」は、生徒にとって中国の影響を受けずに栄えた日本独自の文化の象徴とも呼べる作品である。これにより、生徒の誤った解釈が顕在化することになる。また、この授業を行うまでに日本と東アジアとの関係について丁寧に扱ってきている。生徒が「国風文化」に対して唐の影響を考えられる素地を培うためである。「視点を変える」活動としては、「源氏物語」が確かに唐の影響を受けていることを示す「法苑珠林」という資料を提示した。「国風文化」を唐の影響を受けずに栄えた日本独自の文化と捉えていた生徒に、「国風文化」についての解釈を正しく捉え直す機会を与えるものとなると考えた。

国語科では、「視点を変える」活動として、自分の考えを考え直そうとする契機をつくるために他者との対話活動（仲間との交流）を授業の中に積極的に取り入れている。生徒が主体的に交流を行うことができるように、生徒の気づきをもとに学習課題を設定した。具体的には、読むことの授業において、生徒の気づき（初読の感想）を共感・疑問・批判・表現の観点を意識させ記録し、それを全体で共有する中で、生徒1人1人の中に課題意識をもたせた。それにより、生徒の中に学習課題に対する自己決定感が生まれ、主体的に学習に取り組むようになった。また交流活動を通して課題を解決することにより、交流することの有用感を実感することができ、交流活動に積極的に取り組むようになった。もちろん、学習課題の設定すべてを生徒の気づきだけに任せてしまうのではない。生徒の実態に合わせて教師の考えた身に付けさせたい力と生徒の気づきのずれを、教師が整理し、学習課題を設定しようとしている。「故郷」（3年）の授業では、登場人物の年表を作るという活動を入れることで、生徒が自分たちで、解決すべき課題に気づくことができるように工夫を行った。

保健体育科においては、タブレット端末を用いた「視点を変える」活動を取り入れて授業を構成した。生徒は跳び箱の技を選び、発表会にむけて練習を行った。生徒はタブレット端末を用いながら、自分の選んだ技がよりよくできるためのポイントや改善点を探していく。タブレット端末を用いることで、生徒は自分自身や仲間の動きを視覚的に捉えて、比較することができる。映像を用いながら自分自身を振り返ったり、他者とアドバイスしあったりする場を設けることで、改善を図ることができると考えた。それに加えて今回は、授業におけるお互いの気づきを全体で共有する時間においてもタブレット端末を用いた。生徒は、実際の映像から仲間がどのようなことに気づいたのかを知ることで、生徒は自分自身について振り返っているようであった。また、タブレット端末で撮影した動画を視覚的な資料として用いて解説することで、具体的な視点や気づかせたい部分など、授業者のねらいに生徒を近づけられる効果があったと感じた。

今年度は個の生徒の姿をとおして授業を振り返ってみたことで、次の2点が明らかとなった。

第一に、頭の中で考えたり、思ったり、感じたりしたことについては、ワークシートや作品からはもちろん、映像や音声による記録からも見とることは難しいということである。生徒の思考や感受したことがアウトプットされるような手立てをさらに工夫することが必要である。生徒が「自分なりの結論」に満足している状況や、その状況がゆさぶられている様子、「自分なりの結論」を吟味し、それを改善したり、発展させたりしている様子は、私たちが期待するほどに表出するものではない。それらが顕在化するような手立てを講じることは、生徒の様子を見とりやすくなることにつながると考える。

第二に、生徒の様子をより丁寧に見とるための準備を、授業を構成する段階からしておくことである。「視点を変える」活動が「自分なりの結論」に満足している状況にゆさぶりをかけるものであったのか、授業が各教科で捉えたような「深く考える」授業になっていたのかなどについて考察するためには、授業を構成する段

階で、生徒の予想される反応を明らかにし、そのためにどのような「視点を変える」活動を取り入れようと考えているのかについても示しておく必要があるだろう。そうすれば、「視点を変える」活動がどの場面で、どのような生徒に対して、効果的であるかをより具体的に示すことができると考える。

しかし、個の生徒の姿を追うことで授業の実際を捉えようとする場合、どの生徒を抽出するかによって大きく差が出てしまうことが課題としてあげられる。本研究では「視点を変える」活動により、生徒の「自分なりの結論」に満足している状況にゆさぶりをかけることを目指している。そのような「視点を変える」活動になっていたのかについて考えていくためにも、授業の実際をどう捉えるかについては検討を重ねていく必要があるだろう。

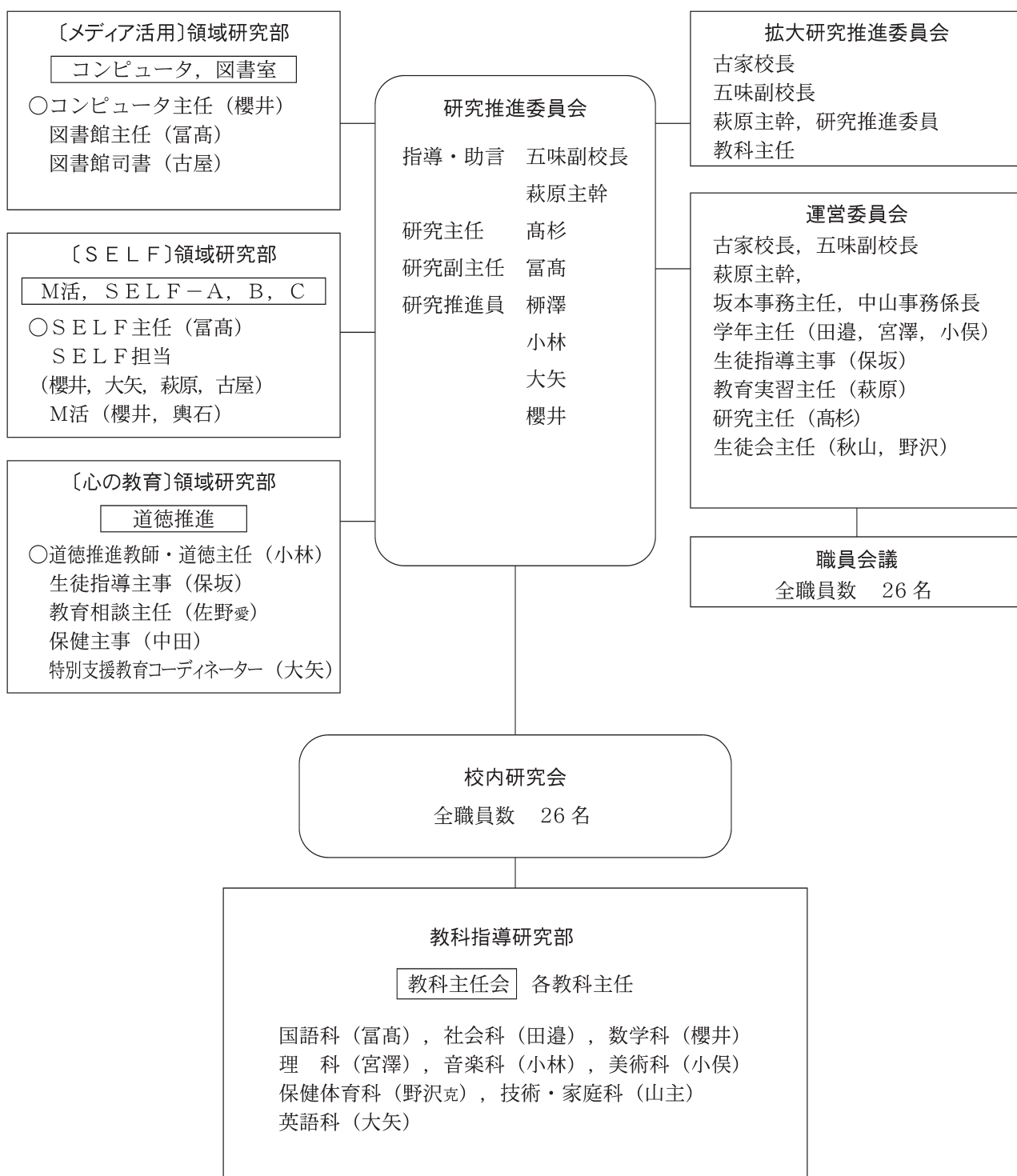
「視点を変える」活動は「深く考える」授業の創造を保障するための手段の一つである。鍵となろう。どのような「視点を変える」活動を行うのかを考えることはもちろんだが、授業を全体的に捉え、「深く考える」授業を実現するために「視点を変える」活動を授業の中にどう位置づけるのか、また、「視点を変える」活動を有効にはたかせるために、授業においてどのような配慮や工夫が必要となるのかなどについても考えていく必要があるだろう。

◆来年度の研究について

前述したような課題は、来年度の研究につながる重要な成果であると考えている。来年度は授業の実際をどう捉えていくのかをさらに検討しつつ、生徒の思考や感受したことがアウトプットされるような手立てや、生徒の姿を丁寧にとらえていくための手立てを工夫することなどに取り組んでいきたい。

来年度は、3年間の実践研究の成果から、「深く考える」授業を実現するための手立てとして「視点を変える」活動の有効性を各教科で明らかにすることを目指す。今年度の公開研究会後の授業者の考察からは「新たな視点が与えられたようである」「さらに細かい視点まで考えることができたと考えられる」「たくさんの視点をもって考えることができた」などの記述があり、本研究のいう「視点を変える」活動の3つの特徴が現れていたことは確かである。来年度はさらに「視点を変える」活動が有効に働いたのかどうかについて考察していく。そのためには、「自分なりの結論」に満足している状況にゆさぶりをかけることができたのか、できなかったのか、またその理由を、教師のねらいとの関係において見とる必要があるだろう。生徒の様子をより丁寧に観察し、ゆさぶりをかけることができたと言えるような根拠を示していきたい。また、ゆさぶりをかけるとはどういうことをいうのか、職員全体で共通理解を図り、その上で「視点を変える」活動について各教科で捉え直し、「深く考える」授業について研究を進めていきたい。

資料 1) 本年度の校内研究組織



資料2) 指導助言者・共同研究者・研究協力員一覧

教科	指導助言者 (県教育委員会・県総合教育センター)		研究協力員	
	共同研究者 (山梨大学)			
国語	県教育委員会 指導主事	望月 陵	葦崎東中学校	高左右美穂子
	県総合教育センター 主査・研修主事	田邊 秀樹	南中学校	加藤 克人
	山梨大学大学院 教授	須貝 千里	附属小学校	前島光一郎
	山梨大学大学院 教授	岩永 正史	甲府第一高等学校	秋山 尚克
社会	県教育委員会 指導主事	佐藤 雄二	上条中学校	中田 敦
	県総合教育センター 主幹・研修主事	長田 英和	附属小学校	那須 栄樹
	山梨大学大学院 教授	服部 一秀	鰻沢中学校	雨宮 文
	山梨大学大学院 准教授	後藤賢次郎	双葉中学校	梶原 隆一
	山梨大学大学院 客員教授	堀之内睦男	都留第二中学校	古川明日香
数学	県教育委員会 指導主事	清水 宏幸	大明小学校	石川 哲也
	県総合教育センター 主査・研修主事	雨宮 友成	増穂小学校	茅野 賢二
	山梨大学大学院 教授	中村 享史	秋山中学校	久島 宏
	東京学芸大学 准教授	清野 辰彦	櫛形中学校	塚田 博紀
	元 山梨大学 教授	吉川 行雄	北中学校	森 秀昭
理科	県教育委員会 指導主事	佐久間 覚	山梨北中学校	中村 宏樹
	県総合教育センター 主幹・研修主事	須田 浩孝	南中学校	武持 貴英
	山梨大学大学院 教授	松森 靖夫	塩山中学校	丹澤 一浩
	山梨大学大学院 准教授	佐藤 寛之	北東中学校	小崎由加里
			上野原中学校	田部 由佳
音楽	県教育委員会 指導主事	内田 浩恵	押原中学校	葉袋 貴
	県総合教育センター 主査・研修主事	鶴田 心	南中学校	近藤 京子
	山梨大学大学院 准教授	大内 邦靖	附属小学校	鈴木 基生
			河口湖南中学校	小林 直子
美術	県教育委員会 指導主事	小田切 武	田富北小学校	鷹野 晃
	県総合教育センター 主幹・研修主事	佐藤 丈	城南中学校	窪田 眞敏
	山梨大学大学院 准教授	新野 貴則	県立美術館	中島 博美
			浅川中学校	渡辺 利徳
			附属小学校	山田麻衣子
保体	県教育委員会 指導主事	石川 忠史	甲西中学校	矢崎 恭央
	県教育委員会 指導主事	桐原 洋	長坂中学校	飯塚 誠吾
	山梨大学教育人間科学部長 同大学院教育学研究科長 教授	中村 和彦	玉穂中学校	片山 敬太
	山梨大学大学院 准教授	木島 章文	南西中学校	村松 裕太
			富士見台中学校	小沢 隆広
技術	県教育委員会 指導主事	中島 浩三	笛南中学校	鈴木 昇
	県総合教育センター 主幹・研修主事	武井 俊文	下吉田中学校	梶原 将司
	山梨大学大学院 教授	上里 正男	西中学校	西川 卓
	山梨大学大学院 教授	佐藤 博	勝沼中学校	内田瑛一郎
			葦崎東中学校	嶋津 英斗
家庭	県教育委員会 指導主事	清水 弘美	大和中学校	永田 恵子
	県総合教育センター 主幹・研修主事	赤岡 玲子	東中学校	清田 礼子
	山梨大学大学院 准教授	志村 結美	春日居中学校	河野美由紀
			北西中学校	宮崎 茜
英語	県教育委員会 指導主事	桑畑 秀子	久那土小学校	石原 敬彦
	県総合教育センター 主幹・研修主事	井上 耕史	笛南中学校	立川 武
	山梨大学大学院 教授	田中 武夫	城南中学校	本田 恵美
			石和中学校	風間 謙
			浅川中学校	佐藤 愛子
		上条中学校	関原 寛明	

資料3) これまでの研究との関わり

本校の過去10年間の研究を振り返ると、平成17年度から19年度までの研究では、「かかわり」をキーワードに、教材と日常事象とのかかわり、教材の持つ学問の体系的なかかわり、教科独自のアイディア同士のかかわりの3点に焦点をあて、学習内容が頭の中で整理、構造化されて活用できるものとなることをねらった。平成20年度から22年度の研究では、互いに関連づけられてきた知識や概念を社会に「発信」することにより、さらに深化させることを目指した。そのために、自分もっている知識や概念をもう一度見つめ直し、相手や状況によって「再構成」することを研究してきた。平成23年度からの3年間は「自ら問う力を育む」を主題に掲げ、生徒自らが「問い」をもつことを切り口とした。考えるべき視点や方向性のもととなる「問い」を、生徒自らがもつことができれば、自分で課題を解決できる力を生徒が身につけられ、「問い」が生徒の思考力・判断力・表現力等を育むきっかけを生み出すものとなると提案してきた。

「深く考える」授業において、生徒は「自分なりの結論」を吟味し、改善したり、発展させたりする。「視点を変える」活動によって「自分なりの結論」の背景にある知識や情報、価値観に目を向け、それらを再構成していく。これは、これまでの本校の研究でいうところの、「かかわり」を見出したり、「知の再構成」をしたりとほぼ同義である。また、生徒がさまざまな「問い」をもつことは、「自分なりの結論」を吟味し、改善したり、発展させたりするために必要なものであると考える。本研究では「視点を変える」活動を意図的に取り入れているが、生徒のもつ「自分なりの結論」をゆさぶり、改善したり、発展させたりすることにつながるには、さまざまな工夫が必要である。その工夫の手がかりは、これまでの研究の成果や課題からも得られるであろう。

生徒が新たな知識や価値を創造していく力を身につけるまでには長い年月が必要であり、それはこの3年間の研究によってのみ達成されるものではない。これまでの研究を生かしながら、「深く考える」授業の創造に粘り強く取り組んでいきたい。